

《別表1》R7 配布する草花の種子・球根

【種子】

※注1

草花の名称	系統・品種等	色	播種時期	花期	申込単位	5mlでまける面積	5ml内の粒数	1ml当たりの係数
コスモス	中高性	混合 (赤、白、桃など)	4～5月	7～10月	5ml	1 m ² (直播)	約 225 粒	2
マリーゴールド	矮性種 フリンジ系 八重咲き	混合 (黄、橙など)	4～7月	6～11月	5ml	5 m ²	約 100 粒	2
ヒャクニチソウ	中高性 八重咲き	混合 (赤、ピンク、黄など)	4～7月	7～10月	5ml	5 m ²	約 100 粒	4
キンギョソウ	矮性種	混合 (白、ピンク、黄など)	4～5月	7～9月	5ml	100 m ²	約 10,000 粒	8
ニチニチソウ	矮性～ 中矮性種	混合	4～6月	7～10月	5ml	12.5 m ²	約 1,000 粒	8
ダリア	花壇用	混合	4～5月	7～10月	5ml	20 m ²	約 150 粒	6

【球根】

※注2

草花の名称	系統・品種等	色	植付時期	花期	申込単位	球根のサイズ	1 m ² に植付時の目安	1 球当たりの係数
グラジオラス	—	単色 (赤、桃、白、黄系及びそのバリエーション)	4～6月	7～10月	50 球	約 10cm	約 40 球 (株間 15cm)	3
ゼフィランサス	カンジダ	単色 (白色)	3～5月	7～10月	50 球	約 4cm	約 100 球 (株間 10cm)	3
リアトリス	一般種 (穂咲き)	単色 (赤紫系)	4～5月	6～9月	50 球	約 8cm	約 10 球 (株間 30cm)	3
クロコスミア	—	混合 (黄系・赤系・オレンジ系)	3～4月	7～8月	50 球	約 6cm	約 10 球 (株間 30cm)	3

◆種子播種面積、粒数、球根のサイズ、球根の植付目安について…種苗メーカーのカatalog等をもとに、一般的な品種の播種量、粒数、球根サイズを参考にしています。必ずしも配布される種子・球根と同じ規格のものとは限りませんので、播種・植付時の目安としてください。

◆系統・品種等に変更する場合があります。

◆色について…カッコ内の配色は参考例です。混合となっている場合も、カッコ内のすべての色が混ざっているわけではありません。また、色は変更になる場合があります。

《別表 2》 配布するさくらの種類

No.	配布申し込み時の名称	備考
1	ヤマザクラ系	
2	オオシマザクラ系	
3	サトザクラ系（八重咲き）	花の形が八重咲きのもの
4	マメザクラ系	
5	エドヒガン系（指定なし）	花の形、樹形とも特に指定しない
6	ジンダイアケボノ	
7	タイリョウザクラ	
8	アーコレード	
9	カンヒザクラ系	

（注 1）1 団体当たりの申込み数量が、20 本以内となるように調整すること。

（さくら分類表）

群	系統	左の説明
ヤマザクラ群	ヤマザクラ系	原種ヤマザクラは、野生サクラの代表種で、直径 2.5～3 cm の白色または淡紅色の花が咲く。代表的な栽培品種に「市原虎の尾」等がある。
	オオシマザクラ系	原種オオシマザクラは成長が早く、潮風に強い。花は純白で香りが強い。代表的な栽培品種に「八重紅大島」「八重の大島」等。
	サトザクラ系	サトザクラは“里の桜”の意味でつけられた園芸品種の総称であり、オオシマザクラをベースとした交雑、交配により多彩な品種群を構成する。代表的な栽培品種に「関山」「普賢象」「松月」「鬱金」「一葉」「駿河台句」等がある。
マメザクラ群	マメザクラ系	富士山を中心とした火山帯に新しく生じた種。低木で、葉の出る前に小型の花を咲かせるものが多い。代表的な栽培品種に「鴛鴦桜」「冬桜」等がある。
エドヒガン群	エドヒガン系	一般に強健で樹齢が長く、大木となるものが多い。花は小輪。代表的な栽培品種に「思川」「八重紅枝垂れ」等がある。
その他	ジンダイアケボノ	中輪、一重咲きで淡紅色。開花期は 4 月上旬。ソメイヨシノよりもてんぐ巢病にかかり難く、濃い花色をしている。ソメイヨシノ系。
	タイリョウザクラ	大輪、一重咲きで淡紅色。開花期は 3 月下旬。熱海市で角田春彦氏が作出した品種で、桜鯛の色と漁の時期に因んでこの名が付いた。てんぐ巢病にかかり難く潮風に強い品種。
	アーコレード	大輪、半八重咲きで淡紅色。英国でオオヤマザクラと小彼岸の交配により育成された品種。日本の気候下では春と秋に開花する事から二季咲となっている。
カンヒザクラ群	カンヒザクラ系	早咲きで花色の濃いものが多い。代表的な園芸品種に「寒桜」「大寒桜」がある。

公益財団法人 日本花の会パンフレットより引用

※上記のさくらの品種は代表的なものの紹介です。配布時に上記品種が配布されるとは限りませんのでご了承ください。

《別表 3》配布する緑化木の種類

樹種 No.	樹 種 名	苗 高 (m)	納入形態
1	サツキ	0.3～	ポット苗
2	ツツジ		
3	ドウダンツツジ		
4	サザンカ		
5	ツバキ		
6	アラカシ		
7	アジサイ		
8	トキワマンサク		
9	アベリア		
10	イロハモミジ		

申込数量：1 団体上限 20 本

さくらの植栽について

桜を植えるということは、郷土の彩を創出するために行う大事業であります。10年後、50年後の風景を創ることを頭に浮かべて実行しましょう。

桜の特性を知って事に当たしましょう。

まず、桜は陽樹で初期成長の早い樹木で、日蔭に弱い性質があるのです。

- ① 品種や土壌条件により樹高の差がありますが一般的には8~12mほどの植栽間隔が必要です。
- ② 陽樹で他の樹種に負けないように初期成長が早いのです。土地要求度は比較的高く、十分な土壌と適当な水分を必要とします。
- ② 苗木を風で揺らすと活着が阻害されます。
- ③ 植穴も十分広く深く掘って初期成長を促してください。

苗木を弱らせないように

- ① 配布される苗木は根の土を落とした荷姿です。細根が乾燥すると活着に影響します。苗木が到着したらすぐ畑に仮植し、散水を十分して白根が発根するまで待つて植栽するのが正しい管理の仕方です。
- ② 仮植場の無い所は、水に浸した藁や新聞紙で包み、乾燥を防ぎます。但し根が蒸れることが無いように注意してください。流水に根を浸けておくのも良いでしょう。ため水はだめです。

苗木の枯損は根を乾かしたことによるものが一番多いです。

植栽の仕方

- ① 植穴の直径は50~75cm。深さは35~40cmを基準にしてください。
- ② 土壌改良剤や肥料などを土とよく混ぜ合わせます。
植える時は土を3分の1程戻し、根を広げそこに土を入れて幹を揺らして土と根を良く馴染ませ、その上に土を被覆する。
根元はやや盛り上がるような仕上がり方が良いでしょう。
- ③ 苗丈1m程度では一本支柱、1.5m以上では3本支柱で固定します。
- ④ 設置完了後、植穴の土がダブダブになるように十分な灌水をして根と土を馴染ませてください。

植栽後の管理

- ① 桜は初期生育が良いと樹形が美しくなります。植栽後必要に応じて灌水と施肥をしましょう。
- ② 根元が雑草に覆われると害虫の隠れ場所になるので除草します。
- ③ 植栽後 2~4 年の間に第 1 回目の剪定をします。1 箇所にも 3 本以上の枝が出る「車枝」は無くし、枝の間隔も 50~70 cm 以上になるように剪定します。細い切口にはニカワの入った墨や木製の塗料などを塗ります。将来支障が生じる方向の枝は初めから除去しておきましょう。剪定の時期は 2 月頃の寒い時期にします。「桜切るバカ、梅切らぬバカ」と言われますが桜は切口から腐朽しやすいからです。梅は枝を切らないと実の収量が減るからです。若い時の剪定は枝も細く、切口が小さく、生長が早いので数年で巻込み傷を塞いでしまうので腐朽菌に侵しません。

グリーンバンクが竹炭を配布する訳

現在サクラを植栽している場所は自然地形の所が少なく、埋め立て地など人工造成地が多く、土壌微生物や腐食物の少ない所に植栽しているケースが多くあります。

これらを補うために植栽時に混入させ土壌条件改善に役立たせているのです。炭もほこりや雨水に当てない清潔なものを使います。大きさも 2~3 cm 位に小さくした方が有効です。

炭はどんな役に立つのか

木材を焼いた黒炭や竹炭は炭化温度が 400℃から 800℃の高熱で炭化した無菌物であり、80 数%以上の炭素で不純物が少ない。木材や竹は小さな細胞が連続して出来ており水を通す導管や仮道管があります。これらの組織が高温で酸素を抑制された状態で炭化されるので炭は多孔質であると言われます。

コークスは石炭を賦荷したのですが被表面積は 1 cm³ 当たり 20m² 程度ですが、炭は 200~300m² と言われます。炭を賦荷してつくる活性炭は 1 cm³ 当たり 800~1,000m² と超多孔質になります。

この穴が微生物のアパートになるのに適した大きさなのです。

ほとんどの植物は菌根類と共生関係を持って生活しています。これらの微生物の生活環境を良くするのに炭は役立っています。

桜の害虫の生態と防除

桜の害虫の代表的なものはオビカレハ、モンクロシャチホコ、アメリカシロヒトリである。

発生に合わせ薬剤散布すればよい。

これらの毛虫の発生時期は

・オビカレハ : 4月～5月

・モンクロシャチホコ : 8月～9月

・アメリカシロヒトリ : ①4月～5月、②8月～9月

以上の事から6月、7月の薬剤散布は不要である。

ソメイヨシノは8月には花芽を形成し休眠に入ろうとし、9月には落葉が始まります。

散布時期は5月と8月の2回でも目的を達成可能である。なお、巡回は行い塊状の幼虫の捕殺に心掛ける。

オビカレハ

サクラ、ウメ、アンズ、モモ、カイドウなどバラ科樹木の葉を食い、特にサクラに異常発生する。年1回発生。初夏、細枝に指輪状に産み付けられた卵塊で越冬し、3月中旬頃からふ化する。最初、枝上に糸を張ったテントをつくって、その中で群居し、夜は出て葉や新芽を食う。終齢近くなるとテントから出て分散する。終齢幼虫は体長55mm、側面が青色、背線が白色という鮮やかな色彩になる。5月下旬、樹皮上に繭をつくり、約半月後に羽化する。

冬期に卵塊を小枝ごと切り取って防除する。若齢幼虫はテントごと取り去る。

薬剤はディブテレックス・

スミチオンなど有効。

モンクロシャチホコ

サクラ、ウメ、リンゴなどバラ科樹木を加害するが主にサクラに異常発生をする。秋の食害であるから木の成長に与える影響は少ないが、花芽を食うため翌年の開花にえいきょうする。

幼虫ははじめ赤褐色、老熟すると紫黒色となり黄色白色の長毛を生ずる。静止するとき、頭と尾を反らすので、フナガタムシめ・シリアゲムシという名がある。老熟幼虫は約50mm。年1回発生。成虫の蛾は7月～8月に羽化し、葉の裏面に30粒くらい塊状に産卵する。幼虫は最初群棲し、のち分散する。10月に入ると地上に降り、浅い土中で繭をつくる。

防除はオビカレハと同じ。

アメリカシロヒトリ

加害樹種は極めて多く、100種以上を数える。特に好む樹種はサクラ、スズカケノキ、クワ、クルミ、ヤナギ、ポプラ、ミズキ、アメリカハナミズキ、シラカンバ、カキ、ハンノキ、エノキ、ニセアカシアなど落葉広葉樹が主である。

成虫は開張25～30mm。はねも体も無紋の白色。第1回発生の雄の前翅には多くの場合、黒紋を散布する。老熟幼虫は体長約30mm、頭部は光沢がある黒色、胴部の背面は灰黒色で側面は淡黄色。各体節の丸いこぶから長い白毛を密生する。毛の色は側面が白色で背面は一部黒色のものが混じる。

1年に2回発生。蛹で越冬し、第1回成虫は5月中旬～6月中旬に出現する。卵は葉裏に200～800粒をかためて生みつける。第2回の成虫は7月下旬～8月下旬に出現する。この成虫は日没後1時間をピークとして羽化し、暫らくすると盛んに飛しょうし、2、3時間後葉に止まり静止する。

雄は夜明け前に配偶行動のための飛しょうを盛んに行い雌を求めて交尾する。雌は交尾が終われば直ちに産卵を始め、1卵塊を産み終われば死ぬ。

ふ化5齢幼虫までは葉肉のみを食べ葉皮と葉脈を残すので遠くからも葉が透けて白く見える。それまでは集団で糸を張り巣をつくっているが、6齢7齢は分散し

単独で葉を丸ごと食べる。そして樹から降りて樹皮の割れ目、羽目板の裏などに入って繭の中で蛹となる。
防除は幼齢の集団でいるときに枝葉ごと除去するか、ディブテレックス・スミチオン乳剤または水和剤1,000倍液を散布する。脱皮阻害剤デミリンやBT製剤も有効である。

その他

キバラモクメキリガ

雑食性でサクラに集団発生することもある1年1回発生。成虫で越冬し、幼虫は5～6月頃現れる。6月上旬ごろから老熟幼虫が土中に入り蛹化し、10月ごろ羽化する。
防除は捕殺するか、ディブテレックス・スミチオンなどの乳剤1,000倍液散布。

サクラヒラタハバチ

幼虫は糸を出しサクラや7カマドの枝葉を巻いた巣をつくり食害する。
1年1回の発生。成虫は4月中旬～5月上旬に現れ、葉裏に20～30粒塊状に産卵する。5月に食害し、6月に入り老熟すると地上に落下し地下30cmのところに土室をつくり、翌春蛹化する。
防除は幼虫を巣ごと取り去り処分するのが最善。薬剤はデナボン・スミチオンなどの乳剤500～1000倍液を用いる。

コスカシバ

幼虫はサクラのほかウメ・モモ・スモモなどの果樹類の樹皮下に穿入し、そこから半透明のヤニと褐色の虫糞を排出する。傷跡から胴枯病菌などが入るため、サクラの大木が枯れる事がある。

成虫は蛾でありながら、一見ハチのように前後翅ともに透明であり、しかも昼間活発に飛び回る。1年1回の発生であるが、成虫羽化期の幅は極めて広く、5月下旬～10月に及ぶ。樹皮の割れ目に産卵し幼虫で越冬し、翌春から夏の間盛んに摂食する。

防除は容易ではない。加害部を切開して幼虫を掘り出すのが最も確実な方法であるが、サクラは腐朽が入りやすいので、その後にトップジンMペーストを塗付する。一般的防除法は6～9月にかけ2～3回、スミチオンなど乳剤100～250倍液を幹に十分散布する。